

# トマスにおける神の知の不変性と時間の認識

上 枝 美 典

本論文では、トマス・アクィナスにおける「全知」の思想の整合性を、とくに時間の認識という観点から検討する。

## 1. 証 明 K

N. Kretzmann は、全知と不変性が両立しないことを以下のように論じた<sup>1)</sup>。以下、この証明を「証明 K」と呼ぶ。

1. 完全なものであれば、それは変化しない。(不変性の仮定)
2. 完全なものであれば、それはすべてのことを知る。(全知の仮定)
3. すべてのことを知ることは、常に今何時かを知ることが含まれる。(仮定 1)
4. 何かが、常に今何時かを知るならば、それは変化する。(仮定 2)
5. ゆえに、完全なものであれば、それは変化する。(2, 3, 4)
6. ゆえに、完全なものであれば、それは完全なものでない。(1, 5)
7. 6 は矛盾。

証明 K は、西洋的有神論一般に向けられたものであり、必ずしもトマスが標的ではない。しかし、一見したところ、トマスの理論もこの批判の射程内にあると思われる。すなわち、トマスにおいても、神はあらゆる点で不変だとされているし (『神学大全』第 1 部第 9 問第 1 項, 第 2 項), その知は、非有 (同第 9 項), 悪 (同第 10 項), 個物 (同第 11

---

1) Kretzmann (1966), pp. 409-410. 原著論文の脚注 5 にある形式的表現を参考にして、論理的な構造が見やすいように表現を多少変更した。

項), そして未来の非必然的な事柄(同第 13 項)にまで及ぶ。

一般的に、「全知」という性格の中に、「今何時かを知る」ことが含まれるかどうかは、議論の余地があるかもしれない。しかし、少なくともトマスは、神が「今」を知っていることを、複数の箇所論じている。たとえば、『真理論』第 2 問第 7 項では、「神は個物が今存在するかしないかを認識するか」(An Deus cognoscat singularia nunc esse vel non esse.) という問いが立てられ、トマスはそれに肯定的に答えている<sup>2)</sup>。

また、トマスにおいて、神は、被造物によって思惟される事柄をすべて認識する<sup>3)</sup>とされるが、少なくとも私たちは、今何時かということと思惟するので、やはり神は、それを認識すると言わなければならないだろう。

したがって、少なくとも一見したところ、トマスの思想は、証明 K の 1, 2, 3 のステップを満たしている。それゆえ、トマスが 4 番目のステップを認めるならば、証明 K は、トマスの中に矛盾があることを示すことになる。

本論では、トマスがこのステップ 4 を認めないことを示したい。

### 1.1 すべてを同時に

Kretzmann も指摘するとおり、証明 K に対するトマスの基本的な反論は、神が、時間的なものを継起的に知るのではなく、「すべてを同時に」(omnia simul) 知る、というものである<sup>4)</sup>。

2) "Sed intellectus divinus, qui est apprehensor materiae, comprehendit non solum essentiam universalem speciei, sed etiam essentiam singularem uniuscuiusque individui; et ideo cognoscit omnia accidentia, et communia toti speciei aut generi, et propria unicuique singulari; inter quae unum est tempus, in quo invenitur unumquodque singulare in rerum natura, secundum cuius determinationem dicitur nunc esse vel non esse. Et ideo Deus cognoscit de unoquoque singulari quod nunc est vel non est; et cognoscit omnia alia enuntiabilia quae formari possunt vel de universalibus, vel de individuis." (*De Verit.*, q. 2, a. 7, c.)

3) "Quaecumque igitur possunt per creaturam fieri vel cogitari vel dici, et etiam quaecumque ipse facere potest, omnia cognoscit Deus, etiam si actu non sint." (*ST I*, q. 14, a. 9, c.)

4) "460.—Amplius. Intellectus successive multa considerantis impossibile est esse unam tantum operationem: cum enim operationes secundum obiecta differant, oportebit diversam esse operationem intellectus qua considerabitur primum, et qua considerabitur secundum. Intellectus autem divini est una operatio, quae est sua essentia, ut probatum est

神の知は継起的でない。つまり、神は、ある一つのことを認識した後で、他のものを認識するというかたちで認識するのではない。神は、継起的でないという意味で、「全てを同時に」というかたちで認識する。継起的でないことは、神の中に運動がないことと関係する。つまり、神は純粹現実態だから、ある部分が可能態にあり、別の部分が現実態にあるということがない。このことはまた、神の存在が、時間的なものではなく、「全てが同時にある」というかたちで、永遠であることにも関連する。実際、トマスは、全てを同時に見る神の知を、「永遠」という言葉に結びつけて表現することもある<sup>5)</sup>。

形式的に言えば、このような神の知は、この世界に生起する全ての時間的な出来事について、

時刻  $t_1$  出来事  $e_1$  が起こる。

時刻  $t_2$  出来事  $e_2$  が起こる。

⋮

時刻  $t_i$  出来事  $e_i$  が起こる。

⋮

というかたちの長大なりストとなると考えられる。もちろん、神の知は

---

supra (cap. 45). Non igitur successive, sed simul omnia sua cognita considerat.

461.—Adhuc. Successio sine tempore intelligi non potest, nec tempus sine motu: cum tempus sit *numerus motus secundum prius et posterius*. In Deo autem impossibile est esse motum aliquem, ut ex supra (cap. 13) dictis haberi potest. ...

462.—Item. Intelligere Dei est ipsum suum esse, ut ex supra (cap. 45) dictis patet. In esse autem divino non est prius et posterius, sed est totum simul, ut supra (cap. 15) ostensum est. Igitur nec consideratio Dei habet prius et posterius, sed omnia simul intelligit.

463.—Praeterea. Omnis intellectus intelligens unum post aliud est quandoque potentia intelligens et quandoque actus: dum enim intelligit primum in actu, intelligit secundum in potentia. Intellectus autem divinus nunquam est in potentia sed semper actu intelligens. ...” (SCG I, cap. 55, nn. 460-463.)

5) “ea quae temporaliter in actum reducuntur, a nobis successive cognoscuntur in tempore, sed a Deo in aeternitate, quae est supra tempus. Unde nobis, quia cognoscimus futura contingentia in quantum talia sunt, certa esse non possunt, sed soli Deo, cuius intelligere est in aeternitate supra tempus. Sicut ille qui vadit per viam, non videt illos qui post eum veniunt, sed ille qui ab aliqua altitudine totam viam intuetur, simul videt omnes transeuntes per viam.” (ST I, q. 14, a. 13, ad 3)

命題の形をとらない<sup>6)</sup>ので、このようなリストがそのまま神の知の中にあるわけではない。しかし、全ての時間的な出来事を同時に知る、という神の知のあり方は、この長大なリストの全ての項目を「かつ」で結んだ一つの命題を直観する知として、人間にもイメージすることが可能であろう。

Kretzmann は、このような考え方に対して、以下のように反撃する<sup>7)</sup>。全てを同時に見るような知には、ある重要な欠点がある。それは、「今何時か」を認識していない、という点である。全てを同時に見る神は、この世界の全ての出来事を、時間系列上のリストとして見るのであろう。いわば神は、この世界の全ての出来事を、その出来事が生起する時刻付きの、巨大な年表として見る。たとえばそれは、ある映画を隅々まで完全に知っている人のようなものである。その人は、映画館でその映画を観ているどんな客よりも、その映画のことを知っている。どのシーンから始まり、どのタイミングで、どのシーンがどのように続いていき、各シーンの内容はどのように関連し合い、どのような意味があり、そして最後にどのシーンで終わるか、というようなことを、彼は完璧に知っている。しかし、この人は、実際にその映画を見ている客が知っている非常に重要なことを知らない。それは、「今、どのシーンが映し出されているか」「今、その映画で何が起きているか」ということである。

たしかに、私たちは、今何時かを知っている。たとえ知らなくても、今は特定の時刻であり、全ての人、その特定の時刻に、何らかのかたちでアクセスできる。今何時かという認識は、大げさに言えば、全人類に共有されている、非常に重要な知識である<sup>8)</sup>。

証明 K の仮定 3 「すべてのことを知ることは、常に今何時かを知ることが含まれる」の内容は、以上のような「今」の認識を想定している。したがって、そのような認識を持つものの知の内容は常に変化する。それゆえ、この反論は、証明 K に対して有効でない。Kretzmann は、

6) *ST I*, q. 14, a. 14.

7) Kretzmann (1966), p. 414.

8) これは、古典的な意味での絶対時間が存在するという主張ではない。少なくとも、物理世界に古典的な意味での絶対時間（と絶対空間）が成立しないことは、特殊相対性理論によって明らかとなっている (Savitt, 1994)。しかし、このことと、少なくとも日常的でマクロな物理的世界において、「今」の同時性が成り立っていることは両立するであろう。

少なくともこの解答が決定的だと見なしているようであり、この議論を以下のように結んでいる。「トマスやオッカム、その他の人々が分かっていたのは、もし神が不変に留まるのであれば、神の知は変化しえないということであった。分かっていたことは、神の知が完全であり、神が純粋に全知であるならば、神の知がまったく不変だということはいえないということである」<sup>9)</sup>。

## 1.2 「今」の客観性

「今」の認識に基づく以上のような Kretzmann の主張に対しては、「今」を指標詞と見なすことで対応が可能であるように思われる。つまり「今」は、「私」や「ここ」と同じように、発話者に相対的に指示対象が決まる言葉である。したがって、「今何時か」という問いにも、その発話がいつ為されたかがわかれば、答えることができる。

たとえば、神の知の中にある巨大な年表の中に、「時刻  $t_1$  に、 $S_1$  が「今何時か」と発話する」という知があれば、神はそれに対して、「(その発話を行った  $S_1$  にとって) 今は  $t_1$  である」と答えることができる<sup>10)</sup>。

しかし、「今」は、たんなる指標詞ではないと思われる。なぜなら、「ここ」や「私」のような指標詞は、発話状況に完全に相対的であるのに対し、「今」は、そのようなかたちで相対的ではないからである。じっさい、この世界の住人である私たち全てにとって、「今」の時刻や日付は一意的に定まる<sup>11)</sup>。時計やカレンダーはそのためにあるのだし、私たちの社会的な活動は、そのように共有された「今」の時刻に基づいて行われている。

あるいはまた、もしも、「今」が、たんなる指標詞であり、「今何時か」という問いが発せられる時刻を指すに過ぎないとすると、もし、「今何時か」という問いを発する人がいなければ、この世界に「今」と

9) “What Aquinas, Ockham, and others *have* recognized is that God’s knowledge cannot be variable if God is to remain immutable. What has *not* been seen is that God’s knowledge cannot be altogether invariable if it is to be perfect, if it is to be genuine omniscience.” (Kretzmann, 1966, p. 415)

10) Cf. Castañeda (1967)

11) もちろん、地域ごとに標準時間帯が示す時刻は異なるが、それらも、協定世界時によって定められる一つの時刻に従う。その意味で、この世界には一つの時間が流れている。

いう言葉が指す対象はないことになる。

しかし、この世界が時間的であり変化のもとにあるということは、たんに人間にそう思われるという以上の、客観的な事実であると思われる。それゆえ、かりに人間が存在せず、「今何時か」「今日は何日か」と問う人がいなくても、そして当然、時計や暦というものが存在しなくても、この世界の事実として、この世界はある一定の変化の段階にあり、ある一定の時間のもとにあると思われる<sup>12)</sup>。

したがって、「今」は、指標詞として意味する、「時刻  $t$  において今何時かを問う人にとっての  $t$ 」ということ以上の客観的な意味をもっていると思われる。

「今」が、通常の指標詞ではないという主張からは、重要な主張を導くことができる。それは、「今」あるいは「今」という言葉が指す特定の日時が、たんに認識内容や言葉の意味にとどまらない、この世界の何らかの性格を確定する、存在論的な属性だということである。

### 1.3 「今」と世界

もし、太郎にとっての「ここ」と、次郎にとっての「ここ」とが異なるようなかたちで、太郎にとっての「今」と次郎にとっての「今」とが、違う時刻や日付を指していたならば、太郎と次郎は決して出会うことができないであろう。それは、待ち合わせの時間がずれるという意味ではない。そうではなく、彼らは異なる時系列に属する別々の世界の住人だからである。

もしも、「今」の時刻を私たちと共有しない人々がいたとしたら、彼らは私たちとは異なる時系列に属している。仮に、私たちの世界で今日が  $m$  月  $n$  日であるならば、当然、明日は  $m$  月  $n+1$  日である<sup>13)</sup>。しかし、今日が、勘違いではなく真の意味で、 $m$  月  $n-1$  日である世界では、明日は  $m$  月  $n$  日である。つまり、日付が 1 日遅れた世界は、この世界

12) キリスト教の文脈では、事態はもっと簡単に表現できる。つまり、「今」は、厳密に、この世界が創造された時点からどれだけの時間が経過したかを指す、この世界の年齢に対応する。キリスト教の文脈を離れても、現代の宇宙論で、宇宙の年齢（ビッグ・バンが今から何年前に起こったか）は一意的に定まると考えられている。

13) ただし、今日が月末であれば、明日は  $m+1$  月 1 日であり、今日が大晦日であれば、明日は 1 月 1 日である。

に決して追いつくことがない。二つの世界は、因果的に隔絶した独立の平行世界である。

しかし、「今」の時刻や日付が、現実の私たちの時刻や日付から真にずれていること自体は、内的に矛盾するわけではない。「今日」が丸1日遅れている世界、あるいは、1時間だけ「今」が進んでいる世界も、それ自体として、なんら矛盾無く存在しうる（そのような世界が実際に存在していると主張しているわけではない<sup>14)</sup>。重要なことは、「今」の時刻がずれている世界は、異なる時系列に属する異なる世界であること、そして、「今」は、そのような世界の統一性と区別との基準となる、重要な存在論的特性だということである。

ここでようやく、本論の主要な問題に到達した。この「今」の、いわば存在論的性格を認めた上で、神の知の不変性を保つことは可能だろうか。そしてそれを、トマスの理論の中に見いだすことは可能か。

## 2. 時間についての神の知

### 2.1 基本事項の確認

始めに、トマスにおけるいくつかの典型的な表現を確認しておこう。まず、神はあらゆる点で不変であり<sup>15)</sup>、永遠それ自体である<sup>16)</sup>。時間的なものが継起的に存在するのに対して、神は、永遠それ自体として、全体が同時に存在する<sup>17)</sup>。実体としての神が、このように不変であり永遠であるのに対応して、神の知もまた、不変であり<sup>18)</sup>、そして永遠的なものとして、全てを同時に見る<sup>19)</sup>。

14) このような時系列は、「第二時系列」(Second Time Series)と呼ばれる事があり、その存在の可能性や条件が議論されている。Cf. Falkenstein (1986), Hollis (1967), King (1995), Quinton (1962), Savitt (1994), Smart (1967), Swartz (1975), Swinburne (1965).

15) *ST I*, q. 9, a. 1.

16) *ST I*, q. 10, a. 2, c.

17) *ST I*, q. 10, a. 4, c.

18) *ST I*, q. 14, a. 15.

19) "Sed horum quae actu non sunt, est attendenda quaedam diversitas. Quaedam enim, licet non sint nunc in actu, tamen vel fuerunt vel erunt, et omnia ista dicitur Deus scire scientia visionis. Quia, cum intelligere Dei, quod est eius esse, aeternitate mensuretur, quae sine successione existens totum tempus comprehendit, praesens intuitus Dei fertur in totum tempus, et in omnia quae sunt in quocumque tempore, sicut in subiecta sibi praesentialiter." (*ST I*, q. 14, a. 9, c.)

この、全てを同時に見る神の知のあり方は、その対象が時間的なものであっても変わらない。時間的なものは、次々に時間の中で現実化しては消えていくが、神はそのようなものですら、同時に、認識する。なぜなら、時間的なものはすべて、永遠である神にとって、現在であり、神の直観は、永遠から、自らの現在においてあるものとして、時間的なものすべてに注がれているからである<sup>20)</sup>。

さて、問題は、どのようにしてこれが可能かということである。とくに、時の流れの中で刻々と変化しつつ流れていくように見えるすべてのものを、どのようにして、神は同時に見ることができるのだろうか。

それは神のみぞ知ることだ、という答えも一案であろう。たしかに、私たちは、神が、神の視点から内的にどのように認識しているのかを記述しようとしているのではない。そうではなく、時間における継起性と同時性という、少なくとも表面的には相反すると思えないことを、なぜトマスは、まるでそこに困難はないかのように結びつけることができたのかを探りたい。私たちの関心は、神がどう考えているかというよりは、トマスがどう考えているかである。

## 2.2 比喩と解釈

トマスは、神が時間的なものをどう認識するかについて、いくつかの比喩を用いている。一つは、どこかの高みから道を行く人々全体を見る、という喩えである<sup>21)</sup>。トマスは、ポエティウスに由来するこの喩えを、『命題集注解』の中で、別の例を用いて説明している。

---

20) “Deus autem cognoscit omnia contingentia, non solum prout sunt in suis causis, sed etiam prout unumquodque eorum est actu in seipso. Et licet contingentia fiant in actu successive, non tamen Deus successive cognoscit contingentia, prout sunt in suo esse, sicut nos, sed simul. Quia sua cognitio mensuratur aeternitate, sicut etiam suum esse, aeternitas autem, tota simul existens, ambit totum tempus, ut supra dictum est. Unde omnia quae sunt in tempore, sunt Deo ab aeterno praesentia, non solum ea ratione qua habet rationes rerum apud se praesentes, ut quidam dicunt, sed quia eius intuitus fertur ab aeterno super omnia, prout sunt in sua praesentialitate.” (ST I, q. 14, a. 13, c.)

21) “Sicut ille qui vadit per viam, non videt illos qui post eum veniunt, sed ille qui ab aliqua altitudine totam viam intuetur, simul videt omnes transeuntes per viam.” (ST I, q. 14, a. 13, ad 3.)



このことがより明らかになるために、例で示されるのがよいだろう。五つの時刻に五つの偶然的な事柄が継起的に起こるのを見る五人の人がいるとせよ。そうすると、私は、この五人が、これら継起的で偶然的な事柄を、現在の的に見る、とすることができる。ところで、これら認識者たちの五つの働き (quinque actus) が、一つの働き (actus unus) であったとしたならば、一つの認識が、これら全ての継的に認識された事柄について、現在のにあつたであろう、と言われえただろう<sup>22)</sup>。

トマスは、この例で、何を表現しようとしているのだろうか。証明 K における「今何時か」という点から、この例を解釈すると、以下のようになるであろう。

刻々と変化する時間の流れの中で、五回、 $t_1, \dots, t_5$  という時刻に、「今何時か」という問いが発せられ、それにたいして次の五つの答えがあつたとする。

1. 今、 $t_1$  である。
2. 今、 $t_2$  である。
3. 今、 $t_3$  である。
4. 今、 $t_4$  である。
5. 今、 $t_5$  である。

トマスは言う。この五つの認識のそれぞれは、その時点で、現在の的な認識である。しかし、これら五つの認識の働きが一つの働きであつたならば、この五つの事柄にかんして一つの認識が現在のに關係したであろう。

私たちの世界には単一の時間が流れている。これを時系列  $T_1$  と呼ば

---

22) “Quod ut melius pateat, exemplis ostendatur. Sint quinque homines qui successive in quinque horis quinque contingencia facta videant. Possum ergo dicere, quod isti quinque vident haec contingencia succedentia praesentialiter. Si autem poneretur quod isti quinque actus cognoscentium essent actus unus, posset dici quod una cognitio esset praesentialiter de omnibus illis cognitis successivis.” (*In I Sent.*, d. 38, q. 1, a. 5, c.)

う。 $T_1$ において、1の認識は、時刻 $t_1$ においてのみ現在の的である。当たり前だが、時が流れ、 $T_1$ において時刻が $t_2$ になると、1の認識は偽となり、2の認識が真となる。前に確認したとおり、もし、「今」が存在論的に重要な、この世界の属性だとすると、2の認識が真であるとき、時系列 $T_1$ において、1の認識は真でありえない。同じことは、どの時刻についても言える。つまり、これら5つの認識は、一つの時系列が流れている一つの世界の中では、同時に真ではありえない。 $T_1$ は特殊な時系列ではないので、これは次のように一般化することができる。

任意の時刻 $t_i$ 、 $t_j (i \neq j)$  が単一の時系列  $T$  に属するならば、「今、 $t_i$  である」と「今、 $t_j$  である」が、同時に真となることはない。

しかし、トマスによれば、五つの認識が一つであるとき、その認識はこれら五つすべてに対して現在の的である。もちろん、そのときそれら五つの認識はすべて真であるだろう。それゆえ、この場合には、「今、 $t_i$  である」と「今、 $t_j$  である」が、同時に真である。ゆえに、後件否定律 (modus tollens) により、そのとき、時刻 $t_i$ 、 $t_j$  は単一の時系列  $T$  に属していない。

したがって、もし1から5の五つの認識が同時に真であるならば、それらは一つの時系列が流れる一つの世界についての認識ではなく、並行して走る五つの異なる世界についての認識である。ただし、この場合、五つの平行世界と言っても、それらが異なるのは、それぞれの世界の「今」の時刻だけである。以前、この世界に生起するすべての出来事について、その時刻を添えた長大なリストについて考察したが、そのような時刻付きのリストという点では、この五つの世界はまったく異ならない。しかし、たとえば世界1では、 $t_1$  が「今」であり、世界2では、 $t_2$  が「今」である、というかたちで、「今」の時刻が異なっている。そして、すでに述べたとおり、その違いは、世界の異なりを生み出すのに十分な違いである。

以上によって、神が異なる「今」を同時に認識するための必要条件が示された。神が、異なる「今」を同時に認識するのであれば、神はこの世界を異なる時系列に沿って多層的に認識していなければならない。

まとめよう。時間の流れの中で、複数の「今」を継的に見るならば、その知は変化する。したがって、知が変化しないならば、複数の「今」を継的に見るのではないはずである。ところが、複数の「今」を同時に見るためには、複数の「今」のそれぞれは、異なる世界の異なる時系列に属するのでなければならない。それゆえ、神の知が変化せず、かつ、神は「今何時か」を認識するのであれば、神は、この世界の時系列と並行して走る無数の時系列を、同時に認識しているのでなければならない。

### 2.3 世界と時間の一性

しかし、一見すると、この解釈には二つの問題があるように思われる。一つは、世界の一性についてである。「今」の異なり、すなわち時系列の異なりに応じて無数の平行世界があるという解釈は、世界が一つであるというトマスの主張<sup>23)</sup>に反するのではないか。

もう一つは、時間の一性についてである。この世界の時系列とは「今」の時刻が異なる、他の複数の時系列を認めることは、この世界の時間が一つである<sup>24)</sup>というトマスの主張と矛盾するように思われる。

この疑問に答えるため、最後に、複数の「今」を同時に見ることと、世界と時間の一性は、どのようにして両立しうるかということについて考えてみたい。

前に論じたように、この世界に時間軸を入れるならば、時間の流れを止めて、全てを年表のように外から眺めることができる。同じように、この世界に「今」軸を入れるならば、「今」の流れを、「今」の外側から眺めることができるであろう。三次元空間に時間軸を入れたものを、四次元時空間 (four dimensional space-time) と呼ぶならば、それに倣って、四次元時空間に「今」軸を入れたものを、五次元「今」時空間 (five dimensional space-time-present) と呼べるかもしれない。

二次元空間 (面) の断面が一次元 (線) であり、三次元空間の断面が二次元であるように、四次元時空間の時間断面は三次元空間である。まったく同様に、五次元「今」時空間の「今」断面は、「今」の四次元時

---

23) *ST I*, q. 47, a. 3.

24) *ST I*, q. 10, a. 6. トマスはそこで、第一運動の一性に基づいて、時間がただ一つであることを示した上で、永劫がただ一つであることを主張している。

空間である。「今」に、私たちの世界の現在の時刻を入れるならば、それはすなわち、「今」の私たちから見た、過去、現在、未来を含む、私たちの現実世界全体である<sup>25)</sup>。

では、「今」軸とは具体的に何であろうか。「今」断面が考えられるような多重世界の中で、神が「今何時か」をどのように知るかを考えてみる。いま、時間の最小単位が秒だとして、世界が2秒で終わるとする。このきわめて短命な世界の「今」にかんする認識は、以下のようになる。

$T_1$  : 世界  $W_1$  が生まれる。

$T_2$  : 世界  $W_1$  で1秒経過。世界  $W_2$  が生まれる。

$T_3$  : 世界  $W_1$  で2秒経過。 $W_1$  が終わる。世界  $W_2$  で1秒経過。世界  $W_3$  が生まれる。

$T_4$  : 世界  $W_2$  で2秒経過。 $W_2$  が終わる。世界  $W_3$  で1秒経過。

$T_5$  : 世界  $W_3$  で2秒経過。 $W_3$  が終わる。

たとえば、世界  $W_2$  の住人が、 $T_3$  において、「今何時か」と問うたとする。答えは、「1秒」である。世界  $W_3$  の住人が、同じ  $T_3$  において、同じ問いを發するなら、答えは、「0秒」である。このリストを一瞥することによって、神は、すべての世界の「今」の流れを、 $T_i$  と  $W_j$  の関数として知ることができる。また、たとえば  $T_4$  において、「今」の時刻が「2秒」である世界は  $W_2$  しかない。このように、世界  $W_i$  は、 $T_j$  の値と、「今」の時刻  $t_k$  の値の関数として一意に定まる。

このように、流れる「今」をとらえるために必要な軸は、上のリストに現れる  $T_i$  の軸である。明らかに、 $T_1, \dots, T_5$  は、時間的世界の中の時刻  $t$  とはまったく異なる。それは言わば、神の中に流れる時間である。無論、神の中に、私たちが経験するような時間が流れているわけではない。私たちの「時間」に相当するものは、神において「永遠」と呼ばれる。つまり  $T$  軸は、「永遠」と呼ばれるものの一つの内実である。神は、自らの中の永遠を用いて、永遠の中に、全ての時間と全ての「今」を、

25) この意味で、「現実」は「現在」と異なることに注意。現実世界は、「今」における時間断面ではなく、全歴史を含む四次元時空の全体である。

一瞥のもとに見ると言ってもよいであろう。つまり、「今」軸とは、神の永遠の現在のことである。

神は、少なくとも五次元「今」時空間の中に、この世界を見ているのでなければならない。そしてトマスによれば、それは、神が世界をそのように見ているというだけでなく、世界それ自体が、神から見れば、そのようなものとして存在していることを意味する。世界自体は、そのような姿で、神の永遠の現在の中に存在し、全てが同時に神によって見られている。

このようにして、神は全ての「今」を、一度に見る。私たちにとって、「今」は刻々と変化するが、神にとって、全ての「今」は、神の目の前に現在するのであり、したがって、私たちにとっての「今」の時刻の変化に応じて、神の知の内容が変化することはない。

以上により、証明 K の 4 が阻却され、結論は帰結しないことが示された。

### 3. 結 び

この世界の真の姿は、神から見た姿であろう。その意味で、この世界の真の姿は、五次元である。しかし、人間は「今」軸の外に出ることができない。そのような時間的存在者は、五次元の世界を、「今」軸上に無数の層をなす多世界のようなものとして理解するしかない。神から見れば、この世界は一つの時間のもとにある一つの世界だが、人間から見ると、この世界は多くの時系列が走る多数の世界としてのみ、神の永遠の直観のもとに、同時に現在的なものでありうる。

#### 参考文献

- Castañeda, Hector-Neri (1967) "Omniscience and Indexical Reference," *Journal of Philosophy*, Vol. 64, pp. 203-209.
- Falkenstein, Lorne (1986) "Spaces and Times: A Kantian Response," *Idealistic Studies: An Interdisciplinary Journal of Philosophy*, Vol. 16, pp. 1-11.
- Hollis, Martin (1967) "Times and Spaces," *Mind: A Quarterly Review of Philosophy*, Vol. 76, pp. 524-536.
- King, Peter J. (1995) "Other Times," *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 73, No. 4, pp. 532-547.

- Kretzmann, Norman (1966) "Omniscience and Immutability," *Journal of Philosophy*, Vol. 63, pp. 409-420.
- Quinton, Anthony (1962) "Spaces and Times," *Philosophy: The Journal of the Royal Institute of Philosophy*, Vol. 37, pp. 130-147.
- Savitt, Steven F. (1994) "The Replacement of Time," *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 72, No. 4, pp. 463-474.
- Smart, J. J. C. (1967) "The Unity of Space-Time," *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 45, pp. 214-217.
- Swartz, Norman M. (1975) "Spatial Worlds and Temporal Worlds: Could There Be More Than One Of Each?" *Ratio: An International Journal of Analytic Philosophy*, Vol. 17, pp. 217-228.
- Swinburne, R. G. (1965) "Times," *Analysis*, Vol. 25, pp. 185-191.

(本研究は、慶應義塾学事振興資金の補助を受けて行なわれた。)